



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

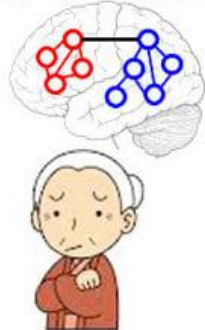
知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3828 号 2017.8.11 発行

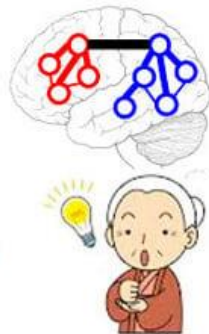
人間の注意力、訓練で向上 京都・学研ATR、実験で実証 京都新聞 2017年8月10日

認知機能の回復のイメージ図 (ATR提供の図を一部改変)

現在の領域間結合



目標の領域間結合



認知機能に関わる脳の各領域のつながりを訓練で調整して注意力を向上させることに、関西文化学術研究都市の国際電気通信基礎技術研究所 (ATR、京都府精華町) などが7日までに人の実験で成功した。精神疾患や認知症の治療法の開発につながる成果という。

グループは山下歩研修研究員、ATR認知機構研究所の今水寛所長など。

脳の活動を細かな部位ごとに見ることができる機能的磁気共鳴装置 (fMRI) で、注意力の持続や抑制に関わる二つの領域「左一次運動野」「左頭頂外側部」を調べた。

実験は20代男女30人に行った。安静な状態で頭の中で右手の指を動かす想像を繰り返す、二つの領域の活動が連動しないときに得点が増える。4日間の実験後、連動性は低下し、別の実験で注意力の持続性が向上したことを確かめた。

連動したとき得点が増える逆の実験では、注意力の持続性が低下した。脳のつながりを調整することで、注意力を向上させたり、低下させることができた。

これまでの研究で、同様の実験の学習効果は2カ月以上維持されるという。

脳の各領域のつながり状態は、自閉スペクトラム症 (ASD) や統合失調症などの精神疾患や、認知症に関係していると考えられている。ATRは「脳のどのつながりが重要か分かれば、治療法が開発できる可能性がある」とし、臨床応用に向けては「倫理の専門家や医師とともに慎重に進め、社会の理解を得たい」としている。

チンパンジーもじゃんけん理解 人間の4歳並み認知力 京都新聞 2017年8月10日

じゃんけんを学ぶチンパンジー。勝ちの方を選んで画面に触れると、干しぶどうのほうびがもらえる (京都大霊長類研究所提供)

チンパンジーもじゃんけんを理解できることを、京都大の松沢哲郎高等研究院特別教授や霊長類研究所大学院生の高潔さんらのグループが実験で確かめた。優劣が循環するような複雑な関係



を人間以外でも理解する能力が備わっていることを示す結果で、国際科学誌に10日発表した。

京大霊長研の7匹のチンパンジー（14～38歳）に対し、「グー」「チョキ」「パー」のうち2種類をモニター画面で見せて、勝ちの方を触ると報酬の干しぶどうが得られるようにしてじゃんけんを学ばせた。48回で1セットの訓練を平均で約300セット繰り返すと5匹が90%以上、残りの2匹も70%以上の正解率になった。

『パー』は『グー』に勝って、『グー』は『チョキ』に勝つ」というような直線的な関係はすぐに理解したが、『グー』に負ける『チョキ』は『パー』に勝つ」というように循環する関係を学ばせるのに時間がかかったという。

人間社会は関係が複雑で、時に循環するような優劣関係があるが、チンパンジー社会は厳格で、直線的な優劣しか存在しない。ところがチンパンジーには、じゃんけんの理解を始める人間の4歳程度と同じくらい柔軟な認知能力があることが示されたという。

松沢特別教授は「チンパンジー以外の動物でもじゃんけんを理解できるか調べたい」と話している。

パラリンピックで進む「種目」改廃 気をもむ選手たち 日本経済新聞 2017年8月10日

2020年東京パラリンピックでは22競技が実施される。昨年のリオデジャネイロ大会からセーリングと7人制サッカー（脳性まひ者サッカー）がはずれ、新たにバドミントンとテコンドーが採用された。国際パラリンピック委員会（IPC）は9月3、4日の理事会で22競技のどの種目を実施するかを決める予定で、注目が集まる。

パラは五輪より種目が多い。リオでは五輪が28競技で306種目、パラが22競技528種目だった。視覚障害や肢体不自由など障害の度合いに応じて選手をクラス分けし、例えば陸上100メートルでも様々なクラスのレースをすることが理由だ。リオ・パラでは男子100メートルだけでも16種目あった。

最も種目が多かったのは18競技で561あった00年シドニー・パラだ。だが翌年に国際オリンピック委員会（IOC）とIPCの合意で、パラリンピックの競技性を強めることが決まった。クラスを統合してメダルの価値を高めようと種目数が削減され、08年北京パラでは20競技で472種目まで減った。その後、パラスポーツの世界的な広がりや選手の増加を反映し、種目数は徐々に回復している。

東京大会の種目数はリオとほぼ変わらないとみられている。ただ種目の改廃がありそうだ。競い合う選手が減ってメダルの価値が下がったり、病気かケガかで障害度が違って競争が不公平と判断されたりすると除外されやすい。陸上ではリオと7月の世界選手権（ロンドン）で日本がメダルをとった3種目が削減対象となっている。

これは選手の手ではいかんともしがたい。五輪と違い、ライバルだけでなくIPCの動向にもパラアスリートは気をもまないといけない。（撰待卓）

仕事でも活躍する障害者を「すごい」と言わない社会に マセソン美季さんのパラフレーズ

日本経済新聞 2017年8月10日

7月21日、私の住むカナダの政府が、次世代のスポーツ選手への投資計画を発表した。身体的、精神的、医科学的、戦術的など、あらゆる面での強化を目指し、2020年東京大会や、それ以降でのメダル増を狙う。

この計画を発表したのがカーラ・クワルトロー・スポーツ障害者大臣。就任した15年11月から、スポーツや障害者の環境に大きな影響を与えている。実は彼女自身、パラリンピックの水泳で3つの銅メダルを獲得したアスリート。私が目標とするパラリンピアンの一入でもある。

東京大会では日本選手が大活躍し、国民全体が盛り上がる大会になってほしい。さらに

カナダと同様にパラリンピアンが、様々な立場で決定権を持つ役職に登用されることが当たり前になる日が来るのを願う。パラアスリートが競技を離れ、社会の中でも活躍するには、世の中の認識も変える必要がある。

例えば日本のオフィスの会議室やセミナー会場では車椅子でも使えるお手洗いが、別の階にしかないことがよくある。ビジネスホテルでも、車椅子が利用できる部屋は付き添いがいることを前提にツインで2人利用のため、普通の部屋より割高になってしまうところが多いし、一定期間滞在ができる短期賃貸マンションには、バリアフリーの部屋がない。

自立した障害者が仕事で利用することが想定されていないのだ。障害のある人たちがビジネスの世界に普通にいることを考えたインフラの整備も、東京大会に向け、徐々に進むことを期待している。

クワルトロー大臣は4人の子供の母親でもある。パラリンピアンでもある私のカナダ人の夫をよく知る彼女と会った時、「うちの夫と同じでお宅のショーも、お父さん業をしているだけで過大評価を受けてるんじゃない？」と笑っていた。妻が不在の間、子供の面倒を見ているだけで「すごいね、偉いね」と夫が言われているうちは、働く女性への世間の認知や理解が得られていない証拠よね、と。

障害者が要職で働くのも同じこと。それが、「すごいね、偉いね」と言われたいような社会になってほしい。

マセソン美季 1973年生まれ。大学1年時に交通事故で車いす生活に。98年長野パラリンピックのアイススレッジスピードレースで金メダル3個、銀メダル1個を獲得。カナダのアイススレッジホッケー選手と結婚し、カナダ在住。2016年から日本財団パラリンピックサポートセンター勤務。

ユニバーサルマナー 検定通じ高齢者・障害者のお手伝い 鈴木友里子

朝日新聞 2017年8月11日



2級の講習会では車椅子の介助方法など実技も学ぶ＝東京都江東区ユニバーサルマナー検定を知っていますか？ 高齢者や障害が



ある人に対する適切なサポート方法を学ぶ民間の資格試験です。2013年に始まり、受講者は年々増加。20年の東京五輪に向けて、関心が高まっているようです。

■東京五輪の影響 開始4年で累計3万人受講

6月下旬、東京都内でユニバーサルマナー検定3級の講習会が開かれた。講師を務めた岸田ひろ実さん(48)は9年前に大動脈解離で下半身がまひし、今は車椅子を使う。

「ユニバーサルマナーとは『自分とは違う誰かのことを思いやり、適切な理解のもと行動すること』です」「私に何かお手伝いできることはありますか」。まずはこのフレーズで話しかけてほしい」

約50人の受講者に岸田さんはこう語りかけ、障害者が普段の生活の中で不安や不自由を感じる場面などを説明した。受講した会社員の女性(44)は「(障害がある)当事者の話が聞けて勉強になる。普段の生活で生かせることが多くあると思う」と話した。

土屋ホールディングス・土屋公三会長 独自開発の社員教育プログラムで40年間研修

北海道新聞 2017年8月10日



ワークライフバランスの実現に向けて、目標を持つ大切さを話す土屋さん

■個人、家庭、会社で目標設定 仕事と生活の両立に大切

土屋ホールディングス(札幌)創業者で会長の土屋公三さん(76)は、独自に開発した社員教育プログラムで約40年間、グループ会社の社員、社外の経営者や従業員向けに研修を行っている。「働き方改革が進む中、ワークライフバランス(仕事と生活の両立)を実現させるには、個人、家庭、会社の3分野でバランスの取れた目標を設けることが大切だ」と話す。

土屋さんは札幌啓北商高卒業後の1960年、大手製紙会社に入社。しかし「高卒の自分は大企業で出世は望めない」と4年後に退職。69年、不動産仲介などの土屋商事を創業した。76年、住宅建築の丸三土屋建設(現土屋ホーム)を設立。2001年、土屋ホーム代表取締役会長に就き今年1月、取締役を退いた。

経営の実践、社外で受講した経営者向けの研修、独自に学んだ経営学などをもとに開発したのが「3KM」という社員教育プログラム。3KMは個人、家庭、会社の3分野のローマ字表記のKと、目標、マネジメント(管理)、モチベーション(意欲)を意味するMなどを合わせた造語だ。

土屋さんは、妻の博子さん(75)と一緒に、重度障害者の長女房子さん(49)を育てた。その経験から「仕事だけでなく、家庭や個人の目標を持つことが大事だ」との考えを抱く。

特殊詐欺、高齢世帯へ猛烈な電話攻勢 調査で判明

神戸新聞 2017年8月11日



調査で使用された「迷惑電話チェッカー」。電話機と接続すれば、不審電話がかかっても着信音が鳴らずにランプが点滅する＝神戸市内

相次ぐ特殊詐欺被害を受け、兵庫県警などが高齢者らの約400世帯に防犯機器を設置し、不審電話について調べたところ、詐欺グループが実際に使ったことのある番号からの着信が多い月で約150回に上ったことが分かった。世帯別の着信回数は不明だが、詐欺グループが頻繁に接触を図ろうとしている現状がうかがえ、県警は「日常的に被害の危険にさらされていることを自覚してほしい」と呼び掛ける。

調査は、特殊詐欺対策に効果があるとされる「迷惑電話チェッカー」と呼ばれる機器の実証実験として県警と通信業者などが実施。2014年12月～16年12月、県内の約400世帯に設置して不審電話について調べた。県警によると、実際に機器を使った大規模調査は初めてという。

迷惑電話チェッカーは、過去に特殊詐欺や悪質セールスなどに利用された約2万5千件の電話番号を「ブラックリスト」として登録し、その番号から電話がかかると着信音が鳴らず、ランプのみが点滅するため受話器を取らずに済む。リストは全国の警察や自治体からの情報を基に自動更新され、最新の不審電話番号が登録される。

調査では、16年の1年間でブラックリストに登録された番号からの着信は2万3918回で、このうち実際に特殊詐欺に利用された番号からは1082回あった。月別の着信で最多はブラックリスト分が16年6月の2280回で、特殊詐欺関連では同10月の154回だった。調査中に詐欺被害に遭った人はいなかった。

県警によると、特殊詐欺グループは会社の退職者や学校卒業生名簿などを不正に入手しているとみられる。名簿の大半には自宅電話が記載されており、そのため固定電話にかかるケースが多い。

県警生活安全企画課は「詐欺グループは電話で言葉巧みに会話を進め、冷静に考える余裕を失わせる。被害を防ぐには、受話器を取らないことが一番」としている。(石川 翠)

障害者なんでもADR 弁護士会が初設置

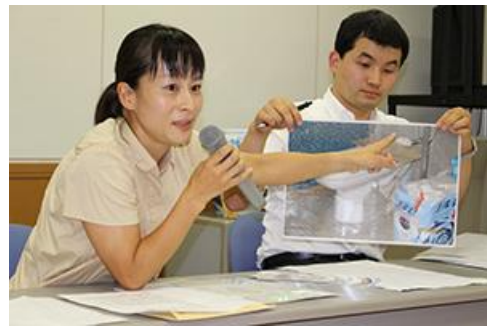
わかやま新報 2017年 08月 10日

和歌山弁護士会は(畑純一会長)は、障害のある人がADR(裁判外紛争解決手続き)を気軽に利用できるよう「障害者なんでもADR」を設置した。9日に和歌山市四番丁の和歌山弁護士会館で記者会見を開き、発表した。同会によると、障害者専用のADR体制の整備は都道府県の弁護士会で初めてという。畑会長は「障害のある人もない人も等しく参加できる社会づくりが大切。和歌山から発信できるのは光栄だ」と話し、制度の利用促進へ意気込みを示した。

導入は1日付。ADRは紛争当事者が弁護士を交えて互いに話し合い、和解や仲裁などで解決する制度。通常の裁判に比べて解決までにかかる時間が短く、費用も安価な点特徴だ。同会は平成25年に紛争解決支援センターを設置し、ADRを実施。昨年4月に障害者差別解消法が施行され、障害のある人に対して社会が合理的配慮を行うことが義務付けられたことを受け、専用ADRを導入した。

申し立て第1号について説明する伊藤弁護士と土橋弁護士

同会は多くの会員弁護士が代理人や和解あっせん人として相談に対応できるよう、同法についての研修を実施する他、県社会福祉士会と協力し、ケースによっては社会福祉士も代理人や和解あっせん人として手続きに参加できるようにする。弁護士による出張ADRも行う。



9日の会見には畑会長の他、長岡健太郎副会長や紛争解決センター運営委員会の内川真由美委員長が出席。導入に尽力した長岡副会長は「障害のある人からの相談は裁判ではなく、話し合いでの解決に向いている。良い案配での解決をお手伝いできれば」と意気込みを示した。

利用を希望する場合は、同会の「高齢者・障がい者あんしん電話相談」(TEL 073・425・4165)に電話する。3日以内に担当弁護士から折り返し電話がある。

同会はまた、同ADRの申し立て第1号となった事案を発表した。申し立て人の代理人を務める伊藤あすみ、土橋弘幸両弁護士によると、申し立て人は50代の女性。病気により左足切断の手術を受け、手動車いすを使用しており、身体障害者向けの市営住宅に住んでいるが、トイレと風呂場が一体となった構造のため、転倒の危険があるという。女性は市に対して改修を求めてきたが、市は予算の制約を理由に応じず、女性は生活保護を受けているため、改修費が出せない状況という。

伊藤弁護士は障害者差別解消法で障害者に対する合理的配慮の提供が義務付けられていることを挙げ、障害の特性に合ったトイレや風呂場への改修を求め、同ADRの申し立てに至ったことを説明した。

<いのちの響き> ダウン症の店長「やっちゃん」(上) 中日新聞 2017年8月10日

竹ようじの先に、茶色い絵の具のようなチョコシロップをちょん、ちょんとつける。キャンパスは、マグカップの中にあふわっとたった白い泡。くりっとした目玉を二つ、慎重に描く。現れたのは、雨降りの天気に合わせてカタツムリ。温かみが増したカフェラテに、

お客さんの頬が思わず緩む。

ここは名古屋市昭和区の住宅街にある「ガーデンカフェ やっちゃんち」。「やっちゃん」こと森川靖子さん（33）はダウン症で、お金の計算もおしゃべりも苦手。時々、飲み物四杯で「一万二千元」と間違えてしまう。そんな時はお客さんが「違うよ、千二百円だよ」と教えてくれる。でも、絵を描くのは得意の一つだ。



カフェの店長を務める「やっちゃん」こと森川靖子さん（中）。母親の和世さん（左）、父親の捷雄さん（右）と店を切り盛りする＝名古屋市昭和区で

やっちゃんが長年の夢をかなえてカフェの店長になったのは三年前。母親の和世さん（67）、父親の捷雄（まさお）さん（70）と切り盛りする。お客さんは一日に、十人から多いときは六十人。三年で約二万人が訪れた。初めて来たお客さんには「お名前教えてください」と聞き、手帳に客の名前と人数を書き込む。伝票はすべて保管しており、その数は段ボール二箱分。和世さんが捨てるように言っても、やっちゃんは「大事なものだから」と許さない。

カフェの店長を夢見たのは高校一年生の時。和世さんが看護師として働いていた病院の喫茶店で、夏休みの実習でコップ洗いをしたのがきっかけだ。店長やお客さんが「上手だねえ」と褒めてくれたのがうれしかった。捷雄さんは長らく単身赴任で、和世さんは毎日を乗り切る

のに必死だった。「喫茶店を開きたい」と言うやっちゃんに、「そうね、いつかね」と受け流していた。

特別支援学校の高等部を卒業後、やっちゃんは和世さんと同じ病院に障害者枠で採用され、新生児集中治療室の看護助手として働き始めた。シーツをたたんだり、哺乳瓶を洗ったり。周囲とうまくコミュニケーションがとれずに、ナースステーションの陰でこっそり泣くこともあった。それでも、ずっと働き続けた。

一生懸命、病院で働きながらも喫茶店の夢は忘れなかった。友達や同僚、親戚が集まった二十五歳の誕生日会では、カウンター付きの店の見取り図を描いて披露した。いつしか捷雄さんは「やっちゃんが十年働いたら、喫茶店を開こう」と約束するように。平屋で庭付き、バリアフリーの内装。自宅近くに理想的な一軒家の貸家が見つかったのは二〇一四年。やっちゃんの貯金を开店資金に充てて、カフェはその年の六月にオープンした。

近所の人が开店前から庭の手入れなどを手伝ってくれ、オープン後も食器洗いなどを助けに来てくれた。昨年九月に和世さんが体調を崩して約一カ月入院した時も、「やっちゃん応援団」の力で乗り切った。

「ここは、みんなの力を借りて運営しているカフェ。だから赤ちゃんからお年寄りまで、誰もが気軽に来られる場所にしたい」と和世さんは話す。「誰でも来られる」という言葉通り、ダウン症の子どもを持つ母親たちにとっても、心の支えとなっている。

（細川暁子）

<ダウン症> 染色体の突然変異によって起きる生まれつきの症状。正式にはダウン症候群。精神や運動機能の発達の遅れ、知的障害、心疾患、耳や目の障害などが表れる。800人から1000人に1人の割合で生まれるとされる。

<いのちの響き> ダウン症の店長「やっちゃん」(下) 中日新聞 2017年8月11日
いま 私の願いごとが かなうならば 翼がほしい
先月上旬、名古屋市昭和区の「ガーデンカフェ やっちゃんち」に、歌声が響いた。「翼

をください」を歌うのは、ダウン症の子どもを持つ母親たち約十人。カフェの店長でダウン症の「やっちゃん」こと森川靖子さん（33）は、歌詞に合わせて中学生の音楽発表会で覚えた手話を披露した。



ダウン症の店長の森川靖子さん（左）を慕い、カフェ「やっちゃんち」に通うようになった河村加織さん（右）。「やっちゃん」の存在に励まされるという＝名古屋市昭和区で

「やっちゃん、手話見せて」という母親たちのリクエストで始まった合唱。「やっちゃん、ありがとう」「すてきだった」。子どもを膝の上に乗せて歌い終えた母親たちから、拍手と歓声があがった。

「やっちゃんち」には和室の広間がある。ここでは、就学前のダウン症の子ども

を持つ母親たちが月一回程度、集会を開いている。約二時間の集まりで、やっちゃんが作る飲み物を片手に情報交換をしたり、子どもを遊ばせたり。会費や和室の利用料などは不要で、母親たちが払うのは一人三百円の飲み物代だけ。

市内に住む河村加織さん（36）が、ダウン症がある長男の駿君（1つ）を連れてやっちゃんちに通いだしたのは約三カ月前。駿君が歩く練習などのために通っている療育センターで、ママ友に教えてもらい、連れてきてもらった。療育センターにいるのは〇～二歳ごろの子だが、やっちゃんちには駿君より大きな子も来る。離乳食の進め方など、先輩ママに聞けるのが心強いという。

「ダウン症の告知を受けた直後は、駿の顔を見るたびに自分を責めて泣いていた。ジロジロと駿を見られたくなくて、外出もしなかった。孤独だった」。河村さんはそう振り返る。

「将来、駿は働けるのか」。初めての子育てで、不安ばかりだった日々。でも、やっちゃんに会い、「先を思い悩むより、今の成長をしっかり見守ろう」と前向きになった。やっちゃんが立派に店長を務めている姿に励まされた。

「自分も苦しんだ分、お母さんたちの気持ちはよく分かる」。やっちゃんと一緒にカフェで働く母親の和世さん（67）は言う。やっちゃんの生後三週間でダウン症の告知を受けた後、和世さんもやはり泣いてばかりいた。やっちゃんに障害があることで、やっちゃんの兄（41）と姉（39）にも、結婚などで将来、影響があるのではと心配した。「電車に乗るときはやっちゃんの顔を隠すように抱っこしていた」

自分ではやっちゃんの障害を受け入れているつもりなのに、つい健常児と比べて落ち込む。さらに、そんな自分に「なんなんだろう」と嫌気が差す。でも、やっちゃんが成長するに連れ、そんなふうには思うことはなくなった。今は「お店に来るお母さんたちが、『やっちゃんは希望』と言ってくれることが、本当にありがたい」。

でも、周囲にそう思われようと、やっちゃん自身に気負いはない。和世さんは「そもそもやっちゃんは、『ダウン症』という言葉は知っていても、それがどういうことや、自分が人と違うとかは、思っていないはず」と話す。

やっちゃんは今日も、お客さんが子どもでもお年寄りでも障害者でも、丁寧に飲み物を作ってテーブルに運び、ゆっくりと話しかける。それはきっと明日も変わらない。「おいしい、ありがとうと言ってもらえるのが、一番うれしいです。お客さんは、みんな同じです」（細川暁子）

「残業代6千万円が未払い」…東大寺福祉事業団の職員ら116人、支払い求め提訴

産経新聞 2017年8月10日

給与規則に沿った残業代の支払いを受けていないとして、奈良市雑司町の社会福祉法人「東大寺福祉事業団」の職員や退職者ら計116人が、同法人を相手取り、計約6千万円

の残業代の支払いなどを求めて奈良地裁に提訴した。提訴は9日付。

訴状によると、原告は同法人が経営する障害のある子供たちを治療・支援する東大寺福祉療育病院に、看護師や介護福祉士、栄養管理士などとして勤務。平成26年9月9日～28年9月8日の間、就業規則として定められた勤務時間を超える勤務を強いられた上、その際に生じた残業代計約6千万円が支払われていないなどとしている。

同法人の労働組合「東大寺整肢園職員組合」の辻井貴彦執行委員長（55）は「強引な経営で多くの不利益をこうむってきた。地域の役に立つ健全な病院に戻したい」とコメント。同法人は「訴状が届いていないのでコメントできない」としている。

長野) 児童虐待相談最多 県が「愛の鞭ゼロ作戦」説明会 鶴信吾

朝日新聞 2017年8月11日

県内の児童虐待の相談件数が昨年度、過去最多となり、県は10日、市町村の担当者を対象にした説明会を実施した。県精神保健福祉センターによると、増加は全国的な傾向で、説明会の開催は、厚生労働省が児童虐待や体罰をなくすために取り組む「愛の鞭（むち）ゼロ作戦」の一環。県こども・家庭課によると、県内5カ所の児童相談所に寄せられた昨年度の相談件数は、前の年度より148件多い1909件で、統計を取り始めた1990年度以来、最多だった。増加は5年連続。虐待の種別では、言葉の暴力など「心理的虐待」が前年度から74件増え1101件と最多。「身体的虐待」が424件で、2番目に多かった。ネグレクト（育児放棄）も362件あった。

日本生命、「就業不能保険」分野に参入へ 精神障害も保障、専業主婦も加入可能に

産経新聞 2017年8月10日

日本生命保険は10日、病気やケガなどで働けない期間中に生活費を保障する「就業不能保険」の新商品を10月から販売すると発表した。精神障害も保障するほか、専業主婦も加入できるなど保障範囲や対象者を広げた。保険料は月3705円から。アメリカンファミリー生命保険（アフラック）や住友生命保険などが先行し市場が伸びていたため、日本生命も追従した。

あいおいニッセイ 新たに2人が入社 立川さん「パラ競技に打ち込める」

東京新聞 2017年8月11日

障害者アスリートの採用を進めているあいおいニッセイ同和損保（渋谷区）で10日、障害者アスリートら2人の入社式があった。長崎県出身で車いすバスケットボールの立川光樹（こうき）さん（25）＝下肢障害＝は、2013年のU23世界選手権（トルコ）で日本代表に選ばれるなどした。けがで入院中のため、病院からテレビ電話で出席。「競技に打ち込める環境をつくってもらい大変ありがたいです」と抱負を語った。昨年ブラジル・リオデジャネイロ五輪の水泳・競泳に出場、800メートルリレーで8位入賞した青木智美（ともみ）さん（22）＝神奈川県出身＝も採用され、入社式に臨んだ。青木さんは「2020年の東京五輪を目指し、さらなる記録更新を目指します」と誓った。2人の入社で同社のパラアスリートは計16人、健常者アスリートは計4人になった。（加藤行平）



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行